令和４年度　新潟よつば学園学校評価

学校評価委員会

１　方法

（１）　対象

①　職員自己評価（校内評価）

②　児童生徒アンケート

③　保護者アンケート（学校関係者評価）

④　学校評議員会（第三者評価）

（２）　項目

①　数値評価　（４：よくあてはまる － １：ほとんどあてはまらない　の４件法）

１　教育部門間交流の取り組み
２　相手と積極的に関わろうとする態度の育成
３　複数障害種学校として価値の発信
４　個性及び障害特性に応じた教育
５　長期的な視点からの系統立った指導

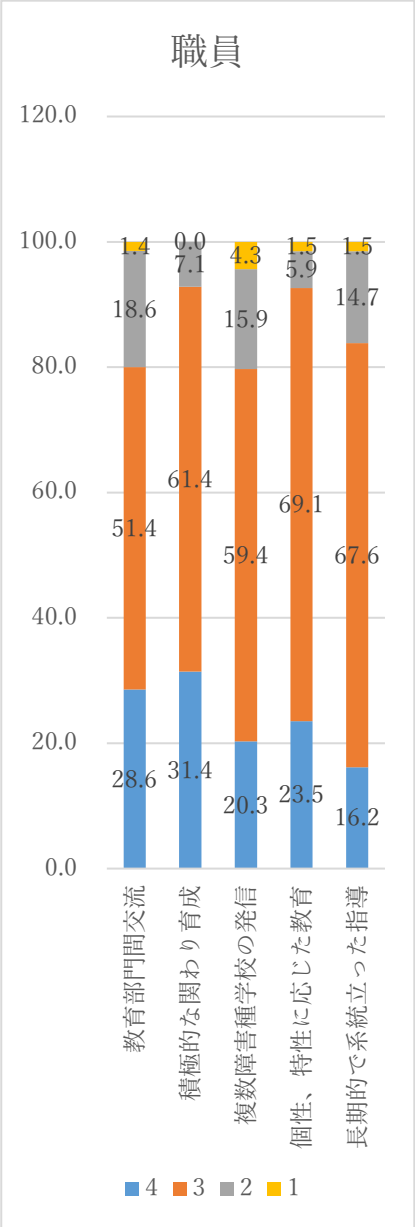
②　記述評価

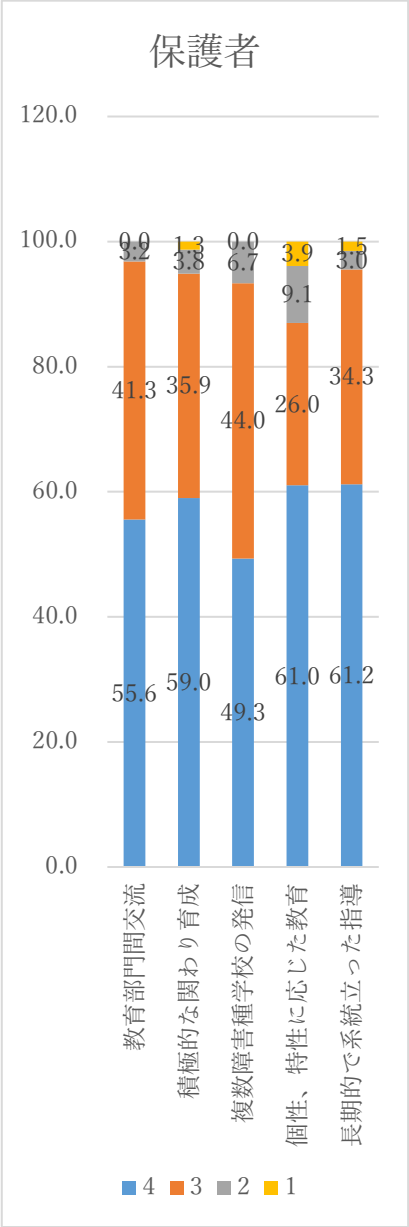
職員自己評価	児童生徒アンケート／保護者アンケート
１　当校の取り組み	１　当校の良いところ
２　学校運営及び組織	２　当校の改善点

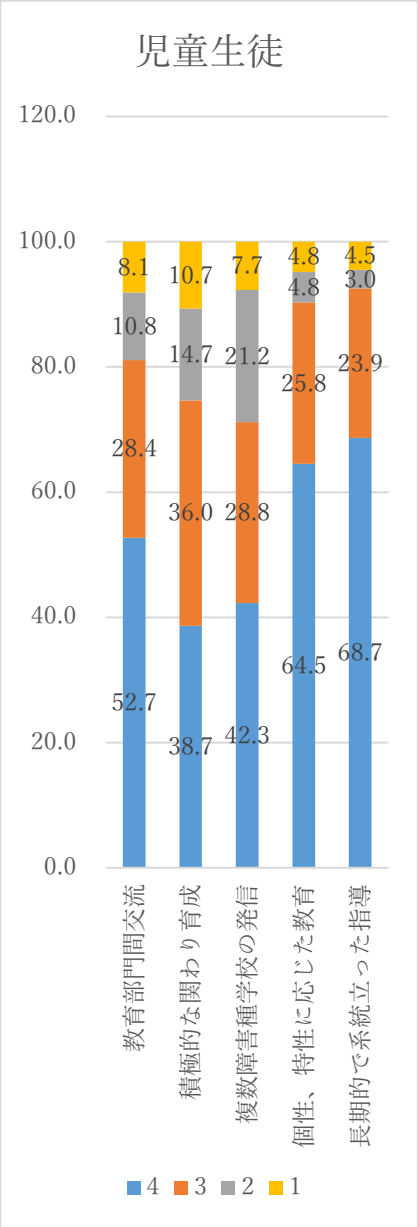
２　結果

（１）　評定値（単位：パーセント）

対象	職員(n=70)				保護者(n=87)				児童生(n=80)			
評定値	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1
教育部門間交流の取り組み	28.6	51.4	18.6	1.4	55.6	41.3	3.2	0.0	52.7	28.4	10.8	8.1
相手と積極的に関わろうとする態度の育成	31.4	61.4	7.1	0.0	59.0	35.9	3.8	1.3	38.7	36.0	14.7	10.7
複数障害種学校として価値の発信	20.3	59.4	15.9	4.3	49.3	44.0	6.7	0.0	42.3	28.8	21.2	7.7
個性及び障害特性に応じた教育	23.5	69.1	5.9	1.5	61.0	26.0	9.1	3.9	64.5	25.8	4.8	4.8
長期的な視点からの系統立った指導	16.2	67.6	14.7	1.5	61.2	34.3	3.0	1.5	68.7	23.9	3.0	4.5







（２）　対象間比較

①　平均と標準偏差

対象	平均	標準偏差
職員	2.9690	0.2118
保護者	3.4049	0.0518
児童生徒	3.1384	0.2447

②　主効果

職員　＜　保護者　　(*p<.05)

職員　＝　児童生徒

保護者　＝　児童生徒

（3）　学校評議員会（第三者評価）要点

・各教育部門の良い点を生かしながら複数障害種学校としての価値を高めて行くべき。 ・各障害種教育に関する専門性の担保が重要。 ・特別支援学校としてのセンター的役割をより充実させて行くことが重要。 ・実践を通して地域への障害者理解に関する啓発として欲しい。

3　考察

総じて職員自己評価に対して児童生徒アンケート及び保護者アンケートにおける評価点が高く、児童生徒と保護者が新しい学校での生活を充実した気持ちで過ごしていることがうかがえる結果であった。各対象とそれぞれの評価項目との交互作用に有意な差が認められる箇所はなかったが、個別の回答では「複数障害種学校として価値の発信」「個性及び障害特性に応じた教育」について評価が低いケースも認められ、校内外に向けた啓発と個性に応じた教育の実現に向けた一層の努力が求められる結果となった。

開校初年度の学校評価であり過年度との比較は行われないが、個々の回答内容を当校に対する叱咤と受け止め、より好ましい幼児児童生徒の教育活動の実現に向けて職員一同心新たにする契機となった。